
嫉妬

No.XIII

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嫉妬

【Nコード】

N0102V

【作者名】

No. XIII

【あらすじ】

The jealousy

東西に別れた未来の日本、東日本東京都のある学校を舞台に2-Dに転校生が入った。

その転校生の名前は秋山清美、その清美が織り成す世界に2-Dは毎日が充実していた。

しかし、夏休みに入った8月のある日、2-Dに悲劇が起きたのであった・・・。

イントロダクションー未知の日本ー

二一世紀

二〇〇一年

日本は東西に分かれて、京都を西側の首都、東京を東側の首都にすることにより各々が地域の問題や政策を施行していくことにした。最初の十年は何事もなく順調にいったが、いや、何事もないように進めていったのだが、ごまかしながらも進めていった。

二〇一二年

団塊の世代が高齢（六五歳以上）に達し、これにより、東西の高齢者数が偏るため、高齢者人口のバランスを保つため、西側は高齢者を東側に移すことを東側に提示し、東側は承諾した。

しかし、その年の八月七日、栃木県の老人保険福祉施設、栃木寿荘にて、西側の高齢者を東側の介護福祉士が虐待し、死亡させた事件（寿荘事件）の発生。

九月十八日、長野県で西側の旅行中の成人カップルを東側の未成年不良少年グループが集団暴行後、殺害するという事件が起きた（長野旅行カップル殺人事件）。

しかし、裁判員裁判により無罪が確定、加害者側の弁護士であるは「被害者のカップルは加害者である少年達の外見にコンプレックスを抱いているのを分かっていたにも関わらず、不必要に触れた上、少年達の仲間の一人を暴行しようとしたのを止めたために起きた事件」と説明。

これを西側は東側の不平等な裁判と指摘、被害者側は控訴、しかし、再審も無罪、それどころか被害者側に有罪判決が下された。

二〇一五年五月一日

東日本大学の教授、本郷弘の「東西統一論」が発表、これは西日本にも広まり、政治に無関心な若者ですら熟読する程の反響を呼んだ。
七月六日

東西統一・東派、西派、東西分離派に分かれて議論が交わされることになった。

二〇一九年十月二三日

東中心派の河東勝美が暗殺、西派の過激派テロ集団を指名手配へ。

二〇五一年二月二五日

過激派テロ集団リーダー、村山好子他幹部二名逮捕。

三月十九日

村山好子と幹部二名暗殺、西派の口封じが有力説。

十一月十三日

河村由香が自殺、遺作に『東日本自作自演説』が東日本の本郷弘により発表。

二〇五二年三月二一日

『東日本自作自演説』に基づいて、国連は西日本を中心にし、日本を統一するように呼び掛けたが、東日本は黙殺。

五月七日

東日本は西日本に対し、全面的な援助等をしないことを発表、これにより、冷戦が始まる。

二〇六七年六月十二日

東日本、遺伝子操作による手術と胎児の『調整』が実現。

二〇六八年二月十四日

遺伝子を調整された初の胎児が午前十時に出産、体重三一〇二キロ、身長五十センチ、妊娠七ヶ月の母体から産まれた未熟児にも関わらず健康体であった。

二〇七四年四月九日

調整された子供達が就学、成績は普通の子供とは平均して上であることが発覚。

二〇七七年八月二日

『調整された子供達』をAdjustmentChildren・通称ACと名付けられる。

二〇八二年四月四日

東日本、国際連盟から脱退。

二〇八四年八月七日

京都府京都市でテロ事件発生、日本統一・西日本派による攻撃と判明。

十月三日

東日本の東京都新宿区でテロ事件発生、死者一六七名、重傷者五四二名、軽傷者九八名、行方不明者三名と被害のみが発表された。

二〇八五年四月一日

西日本、中日本、東日本の三つに別れる、西日本の首都を広島県、経済の中心を福岡県とし、中日本の首都は京都府、経済の中心を大阪府とする。

二〇八八年十一月八日

西日本、中日本に宣戦布告、僅か一週間で中日本降伏、西日本と統一される。

二〇八九年四月一日

西日本、首都を京都府、経済の中心を福岡県とする。

十二月八日

東日本の神奈川県鎌倉市でテロ事件発生、この事件により、東日本派完全鎮圧。

二〇九〇年一月八日

西日本、数々の紆余曲折を乗り越え、東日本との和平条約に成功、西日本が中心とし、首都を京都府、経済の中心を東京都とする。

二二世紀

二一〇一年四月一日

日本統一、完全移行完了

百年に渡る分裂期に終止符

And I begin to move at time.

序章　一ミのフラット

ある住宅地の一軒家に住む一人の少女が、広い部屋の真ん中に置いてあるピアノの前に座って、ピアノを演奏していた。

曲は彼女が好きなアーティストの曲でピアノのメロディーが印象的な曲であった。

すると、部屋の扉がゆっくりと音を起てずに開く。

彼女は気付いていないのか演奏を続けている、指が白鍵と黒鍵を叩く度に部屋に響き渡り、それに誘われるかのように近づく『影』のような『もの』。

静かに曲の終わりを近づくにつれて音も高くなる。

『影』は右手に持っている鈍く光る斧をゆっくりと振り上げる。彼女の背後に一步、また一步近づく、心と呼吸を演奏で静めて貰いながらもまた一步近づく。

せいぜい、二〇メートルもあるかないかの距離が『影』にとっては長い長い道のりだった。

曲は段々、最高潮に近付いていく。

きっと彼女はピアニストを目指していたのかもしれない、目指していないにしても趣味で家族や友人、恋人を楽しませるためにやっていたのかもしれない、そんな思いを『影』は想像していた。

そして、最後の音が曲の終わりを告げようとしたときだった。

彼女の頭上に鈍く輝く斧が最大の仕事をやってのけた。

その瞬間、滴り落ちる鮮血が、白鍵の間に入り、赤く染めていく。

飛び散る脳漿、剥き出しになる脳、骨が真っ二つに割れていたにも関わらず、彼女は演奏を止めなかった。

しかし、指は本来とは違う動きだった。

これで終わるからだろう、曲を終わらさないと思っただろう、赤く染まる指を鍵盤に降ろした。

部屋に響き渡るミのフラット。この曲の最後の音よりも一音高い音

だった。

その瞬間、不協和音が部屋に流れる、彼女は壊れた人形のように指を動かし、演奏を終わらせなかったからだ。

曲ではなく、彼女が最後に演奏した音は指ではなく、赤い柘榴のように割れた頭で響かせた。

これが『影』の最初の『出来事』だった。

あれから何年か経った。

一人の少女が広い部屋で椅子に座って、赤いボディの『レッド・スペシャル』と呼ばれているエレクトリック・ギターを手にしていた。レコーディング室のような部屋で中央にそびえ立つグラランドピアノ、ピアノと対照するように前に置かれているドラム、右隅に置いてあるキーボードが二つ、その隣に立て掛けられているフォーク・ギター、アコースティック・ギター、エレクトリック・ギター、そしてマイクスタンドだけが七つあった。

ところでこのギターはイギリスのロックバンド、クイーンのギターリスト、ブライアン・メイと同じだ、この少女は親戚達の影響で音楽が好きで親戚達でバンドを組んでいる、担当パートはもちろん、エレクトリック・ギター。

ブライアン・メイのようにこのレッド・スペシャルをピック代わりに六ペンス・コインを右手の人差し指と親指で持ち、弦に指が触れるか触れないかの位置に置くと弦を弾き、演奏を始めた。

中々、力強い演奏をしているなと思うながらも『影』は彼女に近づく。

そういえば、最初るときも『彼女』は何かを演奏していたなとフと思いついた。

『影』は今、目の前にいる彼女の顔を知っていた。

あの子の同級生だからだ、あの子を手にかけたときは『快感』だった。

た、未だに覚えている、あの感触を人には言えないというよりも表現出来ないに近い。

『影』はこの少女にも同じ快感を求めていた、もう一度、もう一度と繰り返す心の乾きを潤すために。

そして、右手に持っていたサバイバルナイフを彼女の背中に刃を近付けた。

第一章―ミスキャスト―（前書き）

編集しました

第一章―ミスキャスト―

杉本晶

二〇二三年四月九日

午前八時四二分

東日本東京都渋谷区・私立青葉高等学校
東校舎一階・正面玄関

日本が東と西に別れて、二十二年が過ぎた。

様々な問題が浮き彫りになっていくのを尻目にこの学校の生徒達は新しいクラスメートと教室、教師でこの一年を占っていた。

この学校の制服である紺色のブレザーを着て茶髪に右耳だけにピアスをしている少年、杉本晶すぎもと あきらはクラス分けが記されている東校舎の玄関にある掲示板に自分の名前を捜していた。

自分の名前を見つけた生徒達は騒ぎ、女の子においては悲鳴をあげたり、友達と抱き合ったりと受験に合格した感動を再現していた、中には携帯電話を取り出して記念撮影をしていた。

しかし、このような光景はこの学校だけではないだろう。

晶は必死に背を伸ばしたり、人の間から覗いたりと名前を捜していた、すると「杉本、杉本は2-Dだよ」と後ろから声がした。

晶は声がした方向に振り返ると一人の少女が手を振った。

背は晶と同じぐらいで眼鏡をかけている少女は可愛らしく笑っていた。

彼女の名前は山口美久やまぐち みく、晶とは去年のクラスメートであり、女子卓球部に所属している。

「杉本とあたし、一緒だよ……っていうかクラスは変わらんよ……」

晶は美久に近付いて、「転校生が気になるんよ」と答えた。

「転校生？ ああ、秋山さんね」

美久と晶は掲示板に群がる生徒達から離れていき、教室に向かいながら話す。

「秋山？」

「そう、秋山、秋山清美あきやま きよみって名前らしいよ」

二階の踊り場に行くと二人の男女が話していた。

男の方は茶髪で眼鏡をかけており、背は晶より高かった、女の方は晶と同じぐらいの背で茶髪で両耳にピアスを付けていた。

「あ、美久！ おはよう！」

女は美久に気付き、声をかけた。

女の名前は柴崎美樹しばさき みき、晶と美久のクラスメイトで女子の中では一番気が強い、女子バレーボール部に所属しており、ポジションはウィングスパイカー。

「おはよう、美樹ちゃん」

美久は美樹に挨拶を返した。

「杉本、転校生の名前知ってる？」

男の方が晶に声をかける。

男の名前は進藤浩一しんどう こういち、同じ晶と美久のクラスメイトでクラスではクールな『三』枚目で美樹の彼氏である、バスケットボール部に所属しており、ポジションはシューティングガード。

「秋山清美って言うんやって」

美久が晶の代わりに答えた。

「へえ、そうか・・・女子かあ」

浩一は美樹を見た。

「・・・何？」

美樹は浩一を睨むと浩一は目を逸らした。

「まあ、また後でな」

そう言って、晶と美久は階段を上がっていった。

午後九時00分

204教室・2-D

机は六列に並べられており、一列に四つあった。

しかし、廊下側、教卓から見一番左の列だけ三つあり、一番右の列の一番前の席だけ誰も座っていない。

全員それぞれの席に座っており、晶は教卓から見て、左から三列目、後ろから三番目の席に座っていた。

すると、ガヤガヤと騒がしい教室を静かにさせる音が響いた。

「ああ、みんなおるね・・・」

スーツを着た一人の中年の男が教室に入りながら呟き、教卓に着いた。

彼の名前は本岡孝四郎^{もとおか こうしろう}、このクラスの担任である。担当教科は日本史。

「じゃあ、挨拶しようか、はい、起立」

孝四郎がそう言うときクラスメート二十二名は立ち上がった。

「礼！おはようございます！」

「おはようございます！」

同じタイミングで二十二人分の声が教室に響いた。

「着席」

そして、ガタツガタツと音を鳴らして椅子に座った。

「皆さん、二年に進級おめでとう！今日から二年生やね」とニコニコしながら言うとき黒板の机にあるチョークを右手に持ち、黒板に何かを書き出すと教室はザワザワし始めた、中には黙って孝四郎の書く文字を見ていた者もいたが、ザワザワと周りに話している者達と気持ちとは同じだった。

そして書き終わり机にチョークを落とすように置いた。

黒板には『秋山清美』と書かれていた。

「今日からね、新しく生徒が来るんだけどおね、知ってるかな？」
しかし、孝四郎の言葉を理解しながらも全員答えなかった、もちろん、皆、知っている。

「名簿にもあったよね？どんな子かな？あたしの前の席だよね？」

空いた席の一つ後ろの席に座っていた女子生徒が隣に座っていた男子生徒に話しかけた。

この女子生徒の名前は安西佐奈子あんざい さなこと言い、よく「なんでもないです」や「分かんない」を言う慌てん坊な少女、現在三ヶ月付き合っている彼氏がいる。

「ああ、あったね」と男子生徒は少し素っ気ない返事だが笑顔だった。

この男子生徒の名前は小野隆二おの りゅうじと言い、みんなからは隆君や小野さんと呼ばれている頼りがいのある生徒だ、男子テニス部に所属している。

「隆君、隆君、可愛い子やったらどうする？」

隆二の後ろの席に座っている男子生徒が茶化すように聴く。

この男子生徒の名前は北島泰助きたじま たいすけ、クラスのムードメーカー的存在でよく冗談やツッコミを入れる反面、空気を凍らせる場合もある、バスケットボール部に所属し、ポジションはスモールフォワード。

「そりゃあ・・・うん、まあね・・・」と隆二がニヤニヤと笑いながら言う。泰助もニヤニヤしながら「ああ、やっぱね！そこ大事よね！」と右手の親指を立てて、グッド！と言わんばかりにポーズをとった。

「隆君、喜ぶん早い」

晶が笑いながら隆二に言った。

「それじゃあ、入ってきてもらおうね」

孝四郎はそう言って、教室のドアを開けた。

すると、白い上履きを履いた右足が見えたその瞬間、教室は静かになる、歓迎するためではなく、ただの興味感心のためだ。

次に左足と共に顔も見えた、この学校の制服である紺色のブレザーと藍色のリボンを付け、肩まで伸びた黒髪、穏やかな目、小麦色に焼けた肌とスラッとしたスタイルはこのクラスでも五指に入るぐらい良い、要するに美少女と呼ぶに相応しかった。

そして、少女は教卓の前に立った。

泰助は隆二を見てニヤニヤして、隆二も照れながらニヤニヤしていた。

周りが再びザワザワし始めた、もちろん、悪口ではない、「可愛い」とかそんな類の話した。

晶も周りの生徒と話している、しかし、何か違和感を抱いていた。

すると、孝四郎が手を叩く。

「はいはい、静かにして！」

また教室は静かになる、孝四郎が再び口を開く。

「彼女がね、秋山清美さん……あゝ僕がね、話すよりかは後は秋山さんに話してもらおうかね……」と言いながら、孝四郎は清美を見た。

清美は一つ頷くとニコツと微笑んだ。

「初めまして、秋山清美と言います……親の仕事によりこの東京の高校に通うことになりました……前は西日本の大阪府堺市にいましたけど、ウチは大阪弁を喋らへんで」

この清美の言葉に『時が止まってしまった』。

周りは息をするのを忘れてしまったと言っても良いような雰囲気になってしまった。

すると、それに察した清美は頬を赤くしながら「あ、なに？ つまらなかった？」と独り言のように尋ねた。

「大阪弁？」

佐奈子が呟くと同時にザワザワと周りで話し始めた。

「あ、今のが大阪弁なんだよ、もしかしたら、みんなは聴いたことないかな？」

と孝四郎がフォローをした。

すると、泰助がニヤニヤしながら「とりあえず、席座って落ち着こっか？」と清美に言った。

ハイと返事もせずに清美は赤くなった頬に熱を感じているようで右

手で右の頬を触りながら、佐奈子の前の席に座った。

「えゝまあ、彼女は西日本の大阪府から来ました、とにかく、見ての通り明るい子だからね、色々話し掛けてやってくださいね・・・それじゃあ、杉、クラスリーダーとしての最後の挨拶しようか」

と孝四郎が言うとき晶は「ハアイ」と言いながら立ち上がり、「起立！」と言った。

すると、全員立ち上がった。

午前十一時五二分

西校舎一階・職員室

『影』

「そう言えば、今日から来る新しく生徒が来るんでしたな」
ある教師同士の話声が聴こえる。

私はそれを聴くことしか出来ない、何故なら参加出来るような状態ではないからだ、もっと言えば、その場にいるようでないのだからである。

「女子ですか？」

「女子ですよ、しかし、妙なんですよ」

「何がですか？」

私の代わりに疑問を尋ねた教師は少し真剣な口調だった。

「うゝん、イントネーションというか話し方がなんだか西日本に近いんですよ」

西日本？同じ日本とは言え、国境が出来、今や問題があるなか、この東日本に来るとは。

「まあ、西日本の人間だとしても殆ど問題ありませんがね」

「それはまあ、そうですね」

「本岡先生のクラスですから何の問題ないですよ・・・」

そして、必要なことだけを聴くだけ聴いて二人の会話から私は耳を遠ざけた。

第一章―ミスキャスト―（後書き）

投稿は毎月第一月曜日の予定

第二章 一向こう見ずな天使―Episode?

午後一時二十分

東日本東京都渋谷区・私立青葉高等学校
体育館一階

始業式も終わり、晶達は体育館に居た。

この学校の男子バスケットボール部の練習前から晶と泰助、浩一はユニフォームに着替え、軽く慣らす程度のアップを行っていた。体育館だけでなく、グラウンドや専用の部室は将来役に立つとは言え、ほんの一握りか半分ぐらいの授業よりも今は学校を彩る部活動に集中した方がマシだと言う生徒達のたまり場とも言えるかもしれない。

晶もその一人だ、泰助も浩一も同じだ。

アップを終えた、晶はスリーポイントライン上でバスケットボールを三回バウンドさせた。

「晶、入らんかったら、ジュースやけんな？」

「俺もやけんな」

浩一と泰助が晶の後ろで茶化した。

「はいはい」

晶はそう返事した瞬間、何も聴こえなくなった。

左手は軽く添えるようにボールの左側を持ち、右手はボールの右下を持った、次に両膝を軽く曲げたと思った瞬間、両足で体育館のフロアを軽く踏むようにして蹴り、跳んだ。

晶は右の手首で押し上げるようにして、ボールを放った。

「あ、くそ、決まった」

浩一は呟いたが、晶には聴こえない。

ボールは綺麗な曲線を描いて、目標のリングを通った。

「いきなり決まるかあ」

浩一はボールに近付いて、拾いながら言った。

「簡単にはミスらんよ」

晶が笑いながら応えた。

「じゃあ、あと三十五回連続で決まらんかったらジュース」

泰助がニヤニヤしながら言った。

「ハハハ、無理だろ」

「いやいや、やってみようぞ」

と泰助と晶は笑いながら話をしていたが、浩一だけ別のところを見ていた。

「おい、アレ・・・」

浩一が右手の人差し指が指し示す場所はバレーボール部のコートだった。

「何？柴碕ちゃんが男子バレー部の誰かとイチャイチャしょん？」

「違うわい！ちゃんと見てみろや！」

泰助の言葉に顔を赤くしながら、浩一は泰助と晶の二人に分かるようにもう一度、指し示す。

そこには、三人の女子生徒がいた、美樹、佐奈子、そして清美だった。

三人は何か話し合っているようにも見えるが、佐奈子が清美の隣に立って、目の前にいる美樹に対してお願いをしているようにも見えた。

「・・・ちよつと、行ってみる？」

「どうせ、部活見学かなんかやる？」

浩一の言葉に泰助が反応する。

「・・・だろうな」

晶が話を完結させた。

「まあ、ちよつと気になるけん行ってみるか？」

晶がそう言うのと浩一がすぐさま「まあ、そうだな」と答えた。

「いや、お前は柴碕ちゃん目的だろ？」

泰助がまた浩一をからかったが、二人共無視した。

午後一時二五分

「あ、杉本・・・」

佐奈子が近付いて来た三人に気付いた。

「一体、何しよん？」

晶が佐奈子に尋ねた。

「清美ちゃんに部活案内しているんだよ・・・」

佐奈子が答えると泰助は「秋山さんは女子バレーに入るん？」と清美に尋ねた。

「うーん、まあ、スポーツがしたいからね・・・」

清美が曖昧な答えで返した。

「じゃあ、スポーツならなんでも良いの？」

佐奈子が尋ねると清美は少し考えて「うーん、まあ、そうだね、とにかく球技がしたいね」と答えた。

「どんぐらい出来るん？」

浩一が尋ねる。

「素人だから大したことないよ、気楽にいききたいなあ・・・」

すると、それを聞いた美樹は「じゃあ、清美、あたしと勝負する？」と美樹は少し強めの口調で言った。

その言葉を聴いた晶達四人は美樹の機嫌が悪くなったのに気付いた。理由は美樹が高校の部活で素人が参加するのは良いが「私、素人だから・・・」とか「楽したい」と言い訳や甘いことを言うのが嫌いだからだ。ただし、仲良くない者に限るのだが・・・。

しかも以前に他のクラスの女子にもこのようなやり取りがあったと言う。

しかし、それに気付いていないのか清美は「うん、良いよ！」と笑顔で答えた。

「じゃあ、佐奈ちゃんと浩一とあたしの三人、秋山さんと杉本と北島の三人ね」

美樹は足元に置いてあるバレーボールを拾いながら言う六人はそ

それぞれのコートに別れた。

「ただ、秋山さんがなるべくボールに触ること、とりあえず、一通りのプレーを見せてね」

「うん」

清美は頷いた。

「じゃあ、最初は・・・あたしらね、佐奈ちゃんからサーブして」
「分かった」

佐奈子はそう言うのとバレーボールを左手で上に軽く上げ、右手の拳で下から掬い上げるようにサーブを打った。

しかし、フラフラと曲線を描いたボールは美樹の頭を越えただけネットを越えなかった。

「ゴ、ゴメン！」

「大丈夫、大丈夫、もう一回だけやっていいよ」

美樹は拾ったボールを佐奈子に渡しながら言った。

もう一度、佐奈子はサーブを打った。

次はネットを越え、晶の頭上まで来た。

晶はボールの落下地点下に素早く入り、二歩下がると真つすぐに両手を伸ばし、床と平行にし、下から軽くボールを上げた。

「ナイスレシーブ！」

泰助はそう言いながら、自分はネットの近くに立ち、両膝を軽く曲げ、スパイクを打つ準備をしていた。

清美は泰助に良いスパイクを打たせるようにボールの落下地点に入り、両手を上に上げて、親指だけ広げた。

「行くよ！」

清美はそう言うのと軽く支えるようにボールを両手で上に上げた。

泰助がいる場所にボールが落ちるのを確認した泰助は床を蹴り、跳んだ、と思った瞬間、右肘を曲げ、指を軽く伸ばし、右の掌でボールを叩いた。

しかし、美樹がネット際に居たため、ブロックされた。

「ナイスブロック！」

浩一が言った、その時だった。

ブロックでさらに上上がったボールを誰かがスパイクを打った。
コートの左端にたたき落とされたボールの音が体育館に響いた。

美樹と泰助、浩一は分からなかったが晶と佐奈子は分かっていた。
清美だった、清美がスパイクを打ったのだった。

第二章 一向こう見ずな天使―Episode?

「ねえ、今の・・・凄くない？普通・・・ああいうのって出来るの？」

佐奈子は思わず独り言を呟くように尋ねたが、泰助と美樹は何も言えずに動かなくなったボールを見つめるだけで何も言わなかった、同じように浩一と晶もただ呆然と清美を見ていた。

しかし、清美は五人の反応に関係ないようだった。

「いよおおおおおおおし！よしよしよしよしよしよしよしよしよしよし！いあやったああああ！ねえ？ねえ？見た？見た？見たあ！？今の凄かったよね！？」

清美は小さい子供のように叫び、そして「してやったり」と言った顔で泰助と美樹を見た。

「いや、待って！ドヤ顔はやめよ！！」

泰助が笑いながら言うのとニコニコ笑いながら清美とハイタッチした。

「秋山！ナイススパイク！」

晶は清美に近付いてハイタッチしようとしたが「いやいや！待て待て！お前は来るな！」と泰助が言った。

「は、はあああ！？べ、別に良いだろ？」

「いや、お前、秋山の運貫おうと必死！」

泰助はビシッと人差し指を晶に指した。

「いやいや！そんなわけないだろ！！」

そう二人がふざけているのを尻目に浩一は美樹を見た。

美樹は物凄く複雑な表情をしていた。

怒っているように見えれば、悲しんでいるように見える。

ただ、確実に言えるのは「秋山清美に対しての表情」だと言うことだけだ。

「はいはい、その二人、そろそろ再開しようかな？」

晶と泰助のやり取りを浩一が止めた。

美樹のことを気を使っているのを二人は気付いていた。

「はいはい！」

晶と泰助は自分のポジションに戻った。

「で？ 誰がサーブ？」

晶が泰助に尋ねる。

「じゃあ、秋山、行こうか？」

泰助は清美を見ながら言った。

「うん、良いよ」

清美は浩一からボールを貰い、左手で下から添えるようにボールを持った。

「じゃあ、行くよ！」

清美は左手をそのまま少し下に下げ、左手を上には上げると同時に放すように上に投げると右手で下から掬い上げるようにボールを打った。

ボールは弧を描くように佐奈子の頭上に來た、佐奈子は冷静にレシーブを打ち、浩一の頭上に上げた。

「よし！」

浩一はトスでネット際にボールを上げた。

美樹がスパイクを打てる良い高さだった。

トスしたボールが落下するのを見ながら美樹は考えていた。

「清美は嘘をついているのか？ どう考えても有り得ない、あの動きは清美は『ブロックされることを疑わなかった』としか言いようがない『経験者の動き』だ、『経験者の思考』だ、でも私には敵わない！！！」

そう考えながらも美樹は右腕をしなる鞭のようにしてボールを打った。

清美はネット際にはいない、ブロックをされることはない、レシーブかトスでボールを拾うしかない。

しかし、いくら経験者だろうと難しいボールを美樹は打った、何故なら、コートの右隅を狙って打ったからだ、清美は右側にいるが後

ろに下がってボールを拾うのは難しい、距離だけでなく、スピードもある、美樹自身も五分五分といった所だ。

「素人かどうかはどうでもいい！これをなんとか出来たら経験者かズバ抜けたセンスの持ち主に違いない！絶対に潰す！嘘つきじゃないにしても確実にクラスや部活の仲間に迷惑になる存在、よく『私出来なあい！』みたいなぶりっ子がいるけど、マジムカツク！清美も『それ』だ！ぶりっ子だ！杉村や北島は騙されているけど、私や浩一は騙されない！この勝負でカンパなきまでに叩きのめす！！」
そう心の中で思いながら、美樹はボールが右隅に落ちるのを心待ちしていた。

しかし、美樹にとって予想外の結果になるとは思わなかった。

「俺に任せろ！！」

泰助だった、泰助がボールの落下地点に余裕を持って、素早く入り、レシーブした。

「え！？なんで！？」

美樹は思わず叫んだ、それはそのはずだ。

泰助は左側にいた、右側にいる清美が晶が落下地点に入るならまだ話は分かる、しかし、簡単に入る余裕がないスピードと高さのほずである。

なのに泰助が『予め』予想していたかのようにそこにいた。

「よし！ナイス！」

晶が高く上がったボールの落下地点に入った。

ゆっくり落ちてくるボールに両手を伸ばして、レシーブをする準備に入った。

「秋山！安西を狙え！！」

晶が叫ぶと佐奈子が戸惑いながら「うわ！ひつつつど！！サイテー」と苦笑いした。

「安西をビビらせろ！」

泰助も清美に言う、晶はレシーブをしてボールを高く上げた。

「えー！？でも清美ちゃんはそんなんしないよね？」

「佐奈子ちゃんに狙い撃ち」

清美は笑いながら跳び上がり、右腕を上げた。

「うわぁ・・・もう嫌や」

佐奈子は泣きそうな顔をして呟いた。

浩一はそんな晶達のやり取りを無視するかのように佐奈子の近くについた。

もちろん、佐奈子をカバーするためだ。

美樹は清美のボールを捌くためにやや中央に移動する。

「何故、これも素人であるはずの泰助が落下地点に既にいたかは気になる、しかし、今はこのプレーに集中する」

美樹が今の心境を表すような強い目をしていたのを浩一は見ていた。

「さぁ・・・来い！」

美樹は気合いを入れるように清美に言う。

しかし、清美はボールだけに集中していたため、応えることは出来なかった、その代わり、『別の方法で応える』ことにした。

清美の右手がボールを捉えた。

インパクトの瞬間を美樹の両目で確認した瞬間、美樹の右足が動いた。

「任せ！」

美樹が叫びながらボールの向かう方向に目を向ける、『間違いない、確実にここへ落ちる』と確信した動きを美樹は見せた。

インパクトの強さ、手の角度を見たらある程度分かる、ボールが落ちる場所は『自分の真後ろ』

「それは正しくない、よく見た方が良いよ」

清美の声が聞こえた気がした。

ボールは緩やかな弧を描いて、さっきまで美樹がいた中央に落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0102v/>

嫉妬

2011年10月10日10時33分発行